



”がすがい“になった犬：忠之さん、佳子さんの場合

忠之さん（60代）は手広く事業展開していた実業家。けれども、経済不況の影響で事業のほとんどを手放し、自宅も整理して小さな借家住まいになったのです。

狭い家の中でいら立ち、人が変わったようにつらくあたる忠之さんに耐えきれず、奥さまの佳子さん（50代）は、家を飛び出してしまいました。アパートでひとり暮らしを始めた佳子さんは離婚も考えましたが、別れられない理由がありました。犬のラッキー（11歳）を、忠之さんが手放ささないのです。

人の悲しみを察して 慰める犬の能力

ラッキーは佳子さんが大好き。佳子さんが泣いている時は、そっと足元に寄り添ったり、涙をなめたりします。2人が口論すると間に割って入り、顔を見上げて

悲しげに鳴くのです。そんなラッキーを見ると、佳子さんは切なくなつて、別れる時は絶対にラッキーは自分が引き取りたい、と思うのでした。

「私たちが想像する以上に犬は感情豊かだし、人間の感情も理解しているような気がします」と佳子さん。

佳子さんは、犬の世話と散歩のために忠之さん宅に通い、日中は忠之さんの仕事を手伝って、夕方になるとアパートに帰るのを日課にしています。一時は深刻だった夫婦関係でしたが、最近では経済状態が上向いて生活にも余裕が生まれ、少しずつ、2人の間に会話が増えてきました。佳子さんは言います。

「私たちがやり直せるかどうかは、まだわかりません。でも、ラッキーと一緒の時は、主人も以前のように穏やかになるんです。ラッキーがいなかったら、私たちはとっくに壊れていたと思うんです」

